

# AFC フォーラム Forum

Agriculture, Forestry, Fisheries, Food Business and Consumers

# 1

2020

## 特集 食育。次世代への有り様



## 食育。次世代への有り様

### 3 先進的な食育に取り組む鯖江市の実践

帰山 順子

全国に先駆け、市を挙げて食育に取り組む福井県鯖江市。「医食同源」に地域農業を取り込んだ「医食農同源」をテーマにさまざまな活動を繰り広げ、生涯を通じた食育をめざす

### 7 新しい生活者に寄り添う食育とは

太田 恵理子

最新の調査から食に関する意識や行動を分析。全世代で食生活の変化が進む中、若年層では「食の共有」「外部活用」という二つのオピニオンリーダーが育っている

### 11 いま待ったなしに食育と食農教育

上岡 美保

日本農業を守り食料自給率を上げるには地産地消、国産国消が欠かせない。意識改革には次世代への食育や食農教育が必須であり、特に食育では学校給食が有効な手段だ

#### 特別企画

### 15 令和元年度アグリフードEXPO輝く経営大賞 ～駆け上がる地域農業の担い手たち～

有限会社舟形マッシュルーム／山形県

### 19 新春座談会 ◎『農と食の邂逅』

脇役から主役へ

女性農業が、離陸した

女性農業者が農業、農村に新風を吹かせる。農業には可能性しかないとはっきり言う3人が農業の展望を語る

#### 経営紹介

#### 経営紹介

### 25 堀養蜂園／岐阜県

堀 孝之

養蜂を始め、わずか5年で当初計画の2倍の売り上げを達成した。ストーリーブランディングを重視し、東濃の自然環境だからこそ作れる蜂蜜を催事などで直販する

#### 変革は人にあり

### 27 有限会社藤井牧場／北海道

藤井 雄一郎

乳牛1000頭を誇る大規模農場を経営。牛舎の砂床導入や農場HACCP認証取得、さらには生乳の品質向上に取り組むなど、進取の気性に富む酪農家に迫る

\*本誌掲載文のうち、意見にわたる部分は、筆者個人の見解です。



撮影：鎌形 久

北海道川上郡弟子屈町  
2014年初春

冬の大地の朝

■ 極寒の朝、気球で800m上空へ。広大な大地を照らす朝日■

#### シリーズ・その他

観天望気

東京2020大会と「食」の持続可能性

松本 恵 ..... 2

フォーラムエッセイ

食を食べること、生きること 中江 有里 ..... 30

まちづくりむらづくり

集荷がもたらすヒトとモノの往来

中山間地域の生産者に便宜供与

JAおおいた「オアシス春夏秋冬」／大分県中津市

岡本 真徳 ..... 31

耳よりな話 213回

鳥インフルエンザと水辺の関係

清水 友美子 ..... 34

書評

京都大学経済研究所附属先端政策分析研究センター 編  
『政策をみる眼をやしなう』

武本 俊彦 ..... 35

インフォメーション

持続可能な農林水産業を見据え公庫に期待すること  
情報企画部 ..... 36

広域ネットワークを活かした展示商談会を開催

東北6県の日本公庫各支店 ..... 36

女性・高齢者・農福連携など人材活用をテーマに講演

近畿地区総括課 ..... 36

県内新規就農者同士のネットワークづくりを支援

奈良支店 ..... 36

みんなの広場・編集後記 ..... 37

ご案内

第13回アグリフードEXPO大阪2020 ..... 38

#### 2月号予告

特集は、「国産材利用促進へ向けた需要創造策とは」を予定。

戦後まもなく定植された人工林が伐期を迎える中、少子化などの影響で住宅着工戸数は伸び悩み、新たな需要創造が求められている。木材需要の中で大きなウエートを占める建築用材における効果的な対策は何か。事例を踏まえ考察する。

# 望天 観気

## 東京2020大会と「食」の持続可能性

東京オリンピック・パラリンピック競技大会の準備が佳境を迎えている。近年はオリンピック・パラリンピック開催に当たり環境保全や人権問題などに貢献することが望まれ、二〇二二年のロンドン大会からは「sustainability」(持続可能性)がソフトレガシーとして提言されるようになった。

東京2020大会では、一日四万食を超える食事が提供される。その食材については「持続可能性に配慮した調達基準」として明文化され、気候変動への対応や資源管理、自然共生都市の実現、人権や労働といった人の多様性などに十分に配慮した食材や国産農水産物が優先されることとなった。

このような取り組みは世界中から集まるトップアスリートたちの健康や教育にも大変重要である。彼らは日々のトレーニングや筋量の維持のため、動物性たんぱく質を日常的に多く摂取するが、肉や乳製品などは生産過程で温室効果ガスを多く排出し、地球温暖化に影響する。化石燃料を消費して世界を飛び回るアスリート自らが、持続可能な社会の実現への貢献を求められる中で、大豆やソバなどを工夫した日本の料理を食べてもらえば、温室効果ガス排出量の少ない植物性たんぱく質の活用方法を知ってもらうことになる。また、たんぱく質の過剰摂取やドーピングコントロール違反が問題となっているプロテインパウダーやサプリメントに頼らない食生活の教育にもなるだろう。

選手や関係者、スポーツファンなど海外から多くのお客様がやって来て、「食のおもてなし」が期待されている。日本には世界に誇る「和食」という食文化があり、その伝統やおいしさばかりが注目されがちだが、持続可能性というキーワードからも、世界に発信できることがあるのではないだろうか。日本におけるさまざまな食材の料理方法や食文化の紹介に世界が注目している。東京2020大会は日本だけでなく、世界のアスリートの貴重な教育の機会となるだろう。



日本大学文理学部教授

### 松本 恵

まつもと めぐみ  
北海道札幌市生まれ。北海道大学特任助教、サウスオーストラリア大学客員研究員を経て2019年春より現職。博士(農学)。公認スポーツ栄養士。日本大学にて冬季スポーツや陸上・柔道・トライアスロン選手の栄養サポートに携わる。ソチオリンピックマルチサポートハウスミール担当。東京2020大会選手村メニューアドバイザー委員。13年より日本スポーツ栄養学会理事。

# Forum Essay

フォーラムエッセイ

普段、食料はお店で買う、もしくはお店で食べる。都内に住まいがあるわたしにとって、食料は常にどこかでお金を出して調達するものだ。

五歳のおいっ子も同じく、外出先でお腹がすくと「買って」とコンビニエンスストアを指さす。二四時間、おにぎりもパンも飲み物もそろっている。本当に便利な時代である。

その常識は、思いがけない出来事によって覆された。たとえば地震。

東日本大震災が起きた日、コンビニエンスストアから食料が消えた。人々が買い占めてしまった結果だ。

ここ最近も、大きな台風の前にはコンビニエンスストアやスーパーの食料棚が空っぽになった。人々は不安を感じると、食べ物を買って占めに走る。

理由は一つ。食べられなければ生きられない。実にシンプルな真実だ。

でもその食料がどうやって手元にやってくるのか。

この世にあるすべての商品は、それらの作り手、売り手がいて成り立っているのに、あまり想像していない。たびたび災害によって「〇〇が採れない」「△△がダメになった」と報道されると、供給量が減ったり、値段が上がることを嘆く声上がるが、作り手の心情に触れるニュースはあまりない。大事な食を支えてくれている人々の一大事だというのに。

食を支えるとは、大げさに言えば命を支えることだ。

誰もが食を通じて、知らないうちに誰かと支え合っている。そんなことを身近に感じる機会が日に何度かある。手を合わせて食卓に向かうとき、誰の顔を思い浮かべるわけでもないけれど、心の中で感謝する。

「いただきます」

おいっ子も小さな手を合わせて、つぶやいている。

F



女優・作家  
中江 有里

なかえ ゆり  
1973年大阪生まれ。法政大学卒業。89年芸能界デビュー。テレビドラマ、映画多数出演。02年「納豆ウドン」でNHK大阪ラジオドラマ脚本賞最高賞受賞。著書に「残りものには、過去がある」(新潮社)、「トランスファー」(中央公論新社)など。文化庁文化審議会委員を務める。

## 食べること、生きること



# 集荷がもたらすヒトとモノの往来 中山間地域の生産者に便宜供与

大分県中津市

J A おおいた「オアシス春夏秋冬」副店長

岡本 真徳



## 年商一〇億円の直売所

中山間地域の活性化に、直売所の果たす役割は大きい。「J A おおいた」が二〇一四年四月、大分県中津市内に開設した大規模直売所「オアシス春夏秋冬」は、いまでこそ繁盛しているが、中山間地域であるが故に「野菜の集荷」が大きな課題だった。それを農協のトラックが無料で生産者の近くに設置した集荷場を回ることによって解決している。

「J A おおいた」の北部事業部の中津管内には、既存の直売所が「オアシス山国・洞門・中津」の三店舗と、近隣の北九州市には、スーパーの一角などに開設しているインショップが三店舗ある。そこに、中津市による「道の駅」構想が持ち上がり、その中に「J A ファーマーズマーケット」である「オアシス春夏秋冬」が開設された。「オアシス春夏秋冬」は開設以来売り上げを伸ばし、現在の年商は一〇億円に達しようとする勢いだ。

既存店を維持しながら、これだけの売上高を達成しているのは、「中津直売所生産部会」の生産者の協力があつてこそだ。その生産者を支えているのが、独自の「野菜の集荷」の仕組みである。集荷の維持活性化の一助となっている。紹介しよう。

J A おおいたは、組合員の営農と生活の向上とJ A の経営の安定を図るため、県内一七J A が広域合併して設立された。合併のメリットを活かし、生産者の所得向上と、中山間地域の活性化をはかっている。

その一つが「無料定期便」である。「無料定期便」は、中山間地域の生産者の収益に直結しており、地域にとってなくてはならない仕組みになっている。

中津市は大分県の北西端に位置する県北の中核都市であり、大分市までは八二キロメートル、北九州市へは五二キロメートルの距離にある。中津市の多くは平地で広範囲に水田が広がっている。

一方、本耶馬溪、耶馬溪、山国地域はほとんどが山間部である。風光明媚な土地で、景勝地の耶馬溪や青の洞門などがあり新緑や紅葉のシーズンなどは多くの観光客が訪れ賑わいを見せる。農業では、小規模な農家さんが多い。シカやイノシシなど鳥獣対策を講じつつ、少量多品目に野菜を生産している。また、冬は雪深いため農作業は干しシイタケ加工など非常に限られている。

まず、「無料定期便」の仕組みを説明したい。山間部である山国、耶馬溪、本耶馬溪を二トトラックと四トトラックを使って、毎日のように、生産者の野菜を無料で直売所まで配送している。集荷圏内で一番遠い山国地域から「オアシス春夏秋冬」までは約四〇キロメートル離れている。四トトラックは、朝六時四五分に山国の農協選果場を出発し、比較的広い道路沿いにある各出荷場所まで荷物を集荷して、「オアシス春夏秋冬」、そして北九州のインショップへ運んでいる。一方、二トトラックは、月々土曜日、午後から

profile

岡本 真徳 おかもとまさのり

1989年大分県中津市生まれ。大学卒業後、JAおおいたに就職。現在8年目。1、2年目は園芸課に所属し、金時人参や味一ねぎなどの部会の担当。3年目から直売所担当として中津管内の直営店および北九州のインショップ業務を担う。5年目、オアシス春夏秋冬に異動し、主に売場づくりの業務を担当している。

JAおおいたの無料定期便

2015年10月より中津市内の山国町、本耶馬溪町などの中山間地への荷物集荷を実施。13カ所ある集荷場へ2tトラックで赴き、生産者とコミュニケーションを図る。出荷を諦めていた方や地域の方の生きがいの一環として定着を目指す。中津市と協力しながら中山間地域の活性化、および、直売所の荷物増加を目標とする。

「オアシス春夏秋冬」を出発し、主に4トントラックでは行くことが困難な山沿いを縫うようにして集荷に回る。コンビニエンスストアやスーパーはなく、ジューズの自動販売機も数えるくらいしか存在していない集落ばかりだ。特に山国地域が遠いため、月、水、金は山国地域二カ所および耶馬溪地域二カ所を集荷し、火、木、土は耶馬溪地域四カ所および本耶馬溪地域四カ所を集荷に回る。

どちらのトラックのルートも山道で、走行距離は一〇〇キロメートルを超える。

現在、「無料定期便」を利用する生産者は、二〇〇人ほどの登録があり、常時利用する人はそのなかの二〇人程度だ。多くは七〇、八〇歳代の高齢者である。



上：集荷場の一つである、廃校となった小学校  
下：大勢の人で賑わう「オアシス春夏秋冬」

集荷場は、農協の使っていない旧支店跡地、廃校になった小学校、地域の共同加工場の軒下やお茶工場の倉庫などだ。また、生産者の家の軒下という集荷場もある。生産者からの申し出を受けて、ありがたくお借りしている。集荷場の場所はずべて生産者とともに決めた。いずれの集荷場も生産者が出荷しやすいよう、どの家からもほど近くにある。

生産者は、軽トラック以外にも自転車、電動カート、農業用台車などで自分の野菜を運んでくる。また、集荷場は出荷者同士のコミュニケーションの場になっている。「無料定期便」は、日常化しており、バスのように、集荷する時間を決め回っている。集荷トラックが中山間地域の各所に出向くことから、ド

ライバーが生産者と意見交換できる機会が増えるようになった。直売所での販売状況や売れ筋品目の情報を提供したり、値段の付け方、出荷する数量など具体的な話をすることもある。

運べないから生産を諦める

「オアシス春夏秋冬」のオープンに際しては、当初、地元の農産物が集まるかどうか不安であった。大型の直売所の売場を埋め尽くすほどの地元野菜を確保しなければ、お客を呼ぶことができない。当時、園芸課に所属していた私は、一軒ずつ農家を回り、作付け状況、および、何をどれくらい出荷できるのかなど聞き取り調査をした。

生産者はいままでこのように聞かれたことが

ないとのこと、畑に何を作付け、いつごろ、どのくらい出荷できるか、わからない状態だった。

さらに、山国、耶馬溪、本耶馬溪の中山間地域の生産者にあつては、「高齢化で野菜の出荷自体ができなくなる」という話が多く聞かれた。直売所までは自動車で行かないとならないが、自動車の運転免許証を返したため、運ぶことができないという人もいた。野菜はまだ作りたいが、生産を諦めざるを得ないと言う。

しかし、農業を止めてしまえば、耕作放棄地が増えて地域は荒れる一方だ。強い危機感を覚えた。

同じような問題がこの先増えていくことが予想される。そのため、JAとともに生産者の連携の場である「中津直売所生産部会」がこの課題と向き合うことになった。

### 希望聞き集荷場所を決定

JA内で協議した結果、高齢化していく中山間地を盛り上げたいといった意見が多く、生産物を集める場所をつくるプランを進めることにした。生産部会の役員会にJAとしての案を示した。とくに山国、耶馬溪、本耶馬溪出身の役員からは、中山間地域の厳しい現状と、地域の特徴などを教えてもらった。

そして、総会など生産者が集まる機会に、プランを発表したところ、生産者から拍手を持って歓迎してもらえた。早速、集荷場の設置箇所について希望を聞くなど早期の実現へ向けて動き出した。

集荷場は、生産者が名乗り出てくれた場所以外にも、さまざまな方の協力によって見つける

ことができた。特に耶馬溪については、荷物の集荷に適したJAの旧支店や小学校の廃校が無かつたため、たいへん悩んだ。そこで、何かいい方法が無いのかJA職員内で情報を共有。職員の知り合いや組合員に話をしてもらい、地域の共同加工場の軒下やお茶工場の倉庫など合計五カ所を見つけたことができた。

こうして「無料定期便」はスタートした。便利さが口コミで広まり、新たに出荷会員になる人も出てきた。

「オアシス春夏秋冬」で畑仕事をしている中津の生産者(多くは高齢)と毎日のように話をするが、皆さん、とても元気がいい。声も大きいし農業の話でとても盛り上がる。重たい堆肥を運び草取りなどをこなせるのもパワーがあつてこそだ。収入を得るといよりは、むしろ生きがいや楽しみのために生産者は農作業をしていると感じる。

「無料定期便」での出荷は、「オアシス春夏秋冬」全体から見れば微々たる量と言える。しかしながら、山国、耶馬溪、本耶馬溪の耕作放棄地の増加を防ぐとともに、生産者のやりがいなど元気を支えている重要なシステムだと思う。

### 活気のある中山間地域を

現在、山国、耶馬溪、本耶馬溪の中山間地域に住んでいた人が、中津市の市街地に家を建てて移り住む動きが見える。度重なる山国川の氾濫や耶馬溪の崖崩れなど自然災害が多く発生し、人々は安全で便利な場所を求めて移住する傾向

にある。

その一方で、地域に残った人は、生まれ育った場所を大切に思つて過ごしている。地域活性化のNPO法人も存在し、中山間地域の活性化に取り組んでいる。

行政では中山間地域の高齢化対策として移住者の受け入れにも力を入れている。

U・Iターン者の中では就農する人も多くいる。これらの人たちにも「無料定期便」は大いに役に立つことだろうと思う。うれしい限りだ。

いま、「無料定期便」によって、生産者がやりたい農業を続けることができ、またその生産者によって「オアシス春夏秋冬」も繁栄、その利益を生産者へ還元するという、地域活性化へのよいサイクルができていくと思う。

栄養価が高い北米原産のママ科の多年草アピオスを初めて「オアシス春夏秋冬」へ持ち込んだのも「無料定期便」を利用しての中山間地の生産者だし、キクイモなど売れ筋野菜を生産し始めた人も多い。

これからも、中山間地域で頑張る生産者をサポートするにはどのようなやり方があるのか、引き続き、JAもアイデアを出しながらやっていきたいと考えている。

生産者に生きがいをもって生活してもらい、楽しみながら野菜を出荷してもらおう。今後も中山間地域の生産者に農産物を出荷してもらおうことで、地域の活性化につなげていきたい。

そして、一〇年、二〇年先も活気のある中山間地域づくりを目指して、生産者とともに協力して産地づくりを継続していく決意である。

## 鳥インフルエンザと水辺の関係

国立研究開発法人農業・食品産業総合技術研究機構  
動物研究衛生部門 ウイルス・疫学研究領域 疫学ユニット 主任研究員

清水 友美子

近

年、家畜伝染病による農業被害が国の内外をにぎわせています。このうち、鶏が感染した場合に高率で死亡し、養鶏産業に甚大な被害を与える高病原性鳥インフルエンザについては、疫学調査やウイルス遺伝子解析の結果、野生のカモ類などの渡り鳥がウイルスを国内へ持ち込んで発生する可能性が高いと考えられています。このため、農場周辺に渡り鳥が飛来する池や川などが存在すると、ウイルスの侵入リスクが高まると推測されます。二〇一六～一七年に

かけて、全国的に高病原性鳥インフルエンザが発生した際には、実際に農場の近くに池があった事例が多く見られました。

そ

こで、私たちは農場周辺の池や川の存在が鳥インフルエンザの発生に与える影響を統計的に明らかにするための研究を行いました。

要因と想定されるものが病気の発生に関連しているかどうかを調べる「ケースコントロール研究」という手法を用い、高病原性鳥インフルエンザが発生した農場（ケース）と発生しなかった農場（コントロール）について、それぞれ農場のどのくらい近くに池や川があったかを調べて、距離に違いがあったかどうかを統計的に解析しました。

国内で七九年ぶりに高病原性鳥インフルエンザが発生した二〇〇四年までさかのぼり、



発生鶏舎の約50mにある池。調査時に約100羽のカモ類がいた（撮影地／宮崎県川南町）

そこから発生があった年について一七年まで順に、秋から翌春にかけての発生シーズンごとに比較していくと、一一年までの各シーズンにおいては、農場周辺の水辺の有無と高病原性鳥インフルエンザ発生との関連は見られませんでした。

しかし、一四～一五年と一六～一七年のシーズンについては、鶏舎から約二〇～一〇〇mの範囲に水辺のある農場で発生率が高いという結果になりました。つまり、「農場近隣に池

や川があることが、鳥インフルエンザの発生リスクを高くしている」という可能性が示されたということになります。

ただし、水辺が一〇〇m以上離れていたら安全かという点、必ずしもそうとは言えません。あくまで過去の発生データを解析して得られた結果であるため、距離

については参考値と考えています。

統計的解析により一二年以降について水辺のリスクが顕在化したのは、基本的な防疫対策が強化され、人や車両などに起因するウイルス侵入リスクが低減したためとも考えられます。その上で、近隣に池や川などのある農場ではより発生リスクが高いということを念頭におき、今後もウイルスを「農場に入れない」「鶏舎に入れない」ために、基本の防疫対策を励行していただきたいと思っています。

F



Profile

しみず ゆみこ  
2003年農林水産省入省。動物検疫所、消費・安全局畜産安全管理課、動物衛生課を経て16年10月に農研機構動物研究衛生部門へ。データから事象を読み解くことを目標に修業中。主な取り扱い分野は鳥インフルエンザ、牛白血病、CSFなど。

# 『政策をみる眼をやしなう』

京都大学経済研究所附属先端政策分析研究センター編



(東洋経済新報社・1,500円 税抜)

## 自由と民主主義はポピュリズムに勝てるのか

武本俊彦

(新潟食料農業大学教授)

本書は、二〇一九年三月に京都で開催されたシンポジウム「政策をみる眼をやしなう」で、政策の在り方などを論じてきた三人の有識者の講演とパネルディスカッションをまとめたものだ。市場経済では、自由な競争を通じて最適な財・サービスが供給される。しかし、望ましい供給が実現しない場合には政府の関与(政策)が正当化される。政策は主権者に選ばれた政府により遂行されるが、強制的な手法を取ることが多い。政策の合法性と正当性は、国会審議など手続きの透明性と主権者への説明責任を通じて担保される。その上で、政権が多様な意見を尊重し是非々々に対応する度量に、その妥当性はかかっている。

三人の有識者のうち、時事通信社解説委員の軽部謙介氏は「政策報道の現場で考えたこと」を

テーマに講演した。現政権の国会軽視は議院内閣制によるチェック・アンド・バランスを危機的状況に至らしめており、メディアの立場から事実を突きつけて立案プロセスを検証していく「ファクト・チェック」に取り組むことが重要だと指摘している。

次に、京都大学大学院教授の諸富徹氏は、「財政金融政策における裁量と規律」をテーマに、財政民主主義の視点から日銀の量的緩和政策を検証。日銀総裁が現政権にとって好ましい候補者として選ばれた結果、財政民主主義の存在意義が問われる事態を招いているとしている。

また、滋賀大学特別招聘教授の佐和隆光氏は、「第四次産業革命への適応」をテーマとした。将来AIに代替され大量失業が危惧されることから、資本集約度の高まりで増加する税収を、雇用対策として教育の充実、芸術・文化の振興、公的サービスの拡充などに充てるべきとしている。しかし、現政権は、政府が賃上げを求めると反市場主義的なポピュリズム政権であることから、短期的な大衆の利益を尊重することだけにその税収を使うことになるのではないかと懸念している。

最後に、政策への向き合い方について、佐和氏は批判的な視点を持つことのほか、「世のため人のため」に尽くすことが必要だとしている。その通りだと思いが、対象となる役人をはじめ経済学者などの有識者が、「政権のため自分のため」に向き合うことになっていないとよいのだが。

読まれます 三省堂書店農林水産省売店(2019年11月1日~11月30日・税抜)

タイトル	著者	出版社	定価
1 農政改革 行政官の仕事と責任	奥原 正明/著	日本経済新聞出版社	1,600円
2 絶望の林業	田中 淳夫/著	新泉社	2,200円
3 地域おこし協力隊 10年の挑戦	椎川 忍、小田切 徳美、 佐藤 啓太郎/著	農山漁村文化協会	1,800円
4 食と農の貿易ルール入門 基礎から学ぶWTOとEPA/TPP	作山 巧/著	昭和堂	2,600円
5 OECD政策レビュー・日本農業のイノベーション	OECD/編著	大成出版社	3,000円
6 誰も農業を知らない プロ農家だからわかる日本農業の未来	有坪 民雄/著	原書房	1,800円
7 農業新時代 ネクストファーマーズの挑戦	川内 イオ/著	文藝春秋	800円
8 季刊地域39号 2019年秋号(スマート農業を農家を減らす農業にしない)	農山漁村文化協会/編	農山漁村文化協会	857円
9 「食品の科学」が一冊でまるごとわかる	齋藤 勝裕/著	ベレ出版	1,600円
10 農業と経済 2019年11月臨時増刊号(農と山の資源の未来)	「農業と経済」 編集委員会/編	昭和堂	1,700円

## 懇話会 持続可能な農林水産業を見据え公庫に期待すること

日本公庫では、統合一〇周年を機に昨年度より「農林水産事業懇話会」を開催しています。今年度も全国の農林水産業および食品産業各分野のリーダー経営者が集まり、日本公庫の業務運営などについて意見を交わしました。出席者からは、「公庫のコンサルティング融資は、大変に価値がある取り組みであり、ぜひ推進してほしい」など、公庫の取り組みに期待する声が多く寄せられました。

今回の貴重な意見や提言を今後の事業運営に活かしてまいります。一〇月一七日、於：日本公庫本店  
(情報企画部)



各分野のリーダーと公庫役員が議論

## 商談会 広域ネットワークを活かした展示商談会を開催

農林水産業者と食品加工業者の販路拡大を支援する食の商談会「東北フードネット2019 in 仙台」を開催しました。

四回目となる今年は六九社が出展し、スーパーや飲食店、旅館などに自社製品を売り込みました。楽天株式会社とキャリアバンク株式会社によるセミナーもあり、終始にぎやかな様子で、参加者からは「その場で商談が決まった」「手作り感のある素晴らしい商談会だった」などの声が多く寄せられました。

一〇月九日、於：仙台市、参加者：公庫のお客さまなど二五〇人  
(東北六県の日本公庫各支店)



閉会ギリギリまで商談が続きました

## 講演会 女性高齢者・農福連携など人材活用をテーマに講演

食品業界の現状を理解し交流を深める「食品産業交流会」を開催。手作り惣菜の店を全国展開する株式会社クック・チャム社長の藤田敏子氏が、「女性の力は宝の山」とを活かすクック・チャムの事業展開をテーマに講演しました。

社員の九割を占める女性の登用や高齢者活用、北海道の農福連携事業(A型就労)について語りました。参加者はメモを取るなど熱心に聞いていました。

一〇月二二日、於：大阪市、参加者：近畿二府四県の農業経営者、食品事業者など三九人  
(近畿地区総括課)



これまでの経験を思い出し、感極まる場面もありました

## 交流会 県内新規就農者同士のネットワークづくりを支援

講演会と意見交換を目的とした「奈良県認定新規就農者の集い」を初めて開催。まず、イチゴ生産者で「パールホワイト」と「真珠姫」を育種・開発した前田光樹氏が、栽培技術の習得の重要性について講演。その後、新規就農者ならではの経営課題と解決策について積極的に意見が交わされました。

参加者からは、「栽培技術が基本だと改めて認識した」「こうして集まる機会は貴重で、また参加したい」との声が寄せられました。

一二月二二日、於：奈良市、参加者：新規就農者など三七人  
(奈良支店)



熱心に意見を交換する参加者

# みんなの広場

## ふるさとの田んぼと水子ども絵画展2019

二月七日に全国土地改良事業団体連合会主催(日本公庫農林水産事業後援)「ふるさとの田んぼと水子ども絵画展2019」授賞式が開催されました。



賞状を手に、にっこり笑顔のさゆなちゃん。ご両親と2人の妹、賞状を授与した情報企画部の西山とともに

絵画展は子どもたちに田んぼやため池など水の循環と環境保全の

機能への理解を促し、子どもたちのまなざしを大人へ届けることを目的としています。

日本公庫農林水産事業本部長賞は、島さゆなちゃん(愛知県武豊町立衣浦小学校四年)が受賞しました。

受賞作品「大きくなあれ!子ブタちゃん」は、家族が経営する養豚場を描いたものです。幸せそうなお母さんブタやかわいらしい子ブタなど一匹一匹を丁寧に描いています。その様子からブタが伸び伸びと育てられている様子が伝わります。

受賞作品は本誌の裏表紙に掲載しています。(情報企画部)

み返したいと思っています。

(東温市 黒瀬 理恵)

### みんなの広場へのご意見募集

本誌への感想や農林漁業の発展に向けたご意見などを同封の読者アンケートにてお寄せください。「みんなの広場」に掲載します。2000字程度ですが、誌面の都合上、編集させていただくことがあります。

「郵送およびFAX先」

〒000-0000

東京都千代田区大手町一丁目一四

大手町フィナンシャルシティノースタワー

日本政策金融公庫 農林水産事業本部

AFCフォーラム編集部

FAX 03-3133-7011

03-3133-7011

## 編集後記

④ 昨年、脱メタボをめざし、炭水化物ダイエットに挑戦。二か月間の取り組みの成果は、体重8kg、グラム減、胴回り10cmメートル減と見事に目標を達成し、「食」の影響力の大きさに改めて気づきました。今年も、栄養バランスに配慮し、国産食材にこだわる一年にしたいと思っています。本年もご愛読よろしく願います。(西山)

④ 「スポンジのように多くのことを吸収したい」と笑顔で話していた堀養蜂園の堀さん。催事へ出店するたびに、積極的に他の出店者へ声をかけ、情報交換をして人脈を広げているそうです。その行動力こそ、堀さんの一番の強みだと感じました。これからどのように事業を展開させていくのか、五年後の堀養蜂園の姿が本当に楽しみです。(山本)

④ 女性座談会トピラ写真はカメラマン入魂の一枚です。微妙な高低差演出のため松本さんには二つ重ねたグラグラするイスに座ってもらい、さらに風が必要ということで、横で編集部メンバーがダンボール板でせつせと扇ぎます。それで誰も想像しなかった「体をグッと右に傾けて」の指示に三人とも大笑い。ぜひ写真にも注目してくださいね。(城間)

④ 初めて生のマッシュルームを入れたサラダにトライ。ひと口ごとに香りがふわりと鼻に抜け、なんとも豊かな気持ちになりました。洋のイメージが強いマッシュルームですが、実は和食にも中華にも合うのだそう。舟形マッシュルームのウェブサイトで紹介されているレシピを頼りに、マッシュルームの新天地を開拓したいと思っています。(竹中)

## AFCフォーラム Forum

### 編集

前田 美幸 西山 大也 高雄 和彦  
山本 晶子 城間 綾子 竹中 夕美  
鈴木 晃子

### 編集協力

青木 宏高 村田 泰夫

### 発行

(株)日本政策金融公庫 農林水産事業本部  
Tel. 03(3270)2268  
Fax. 03(3270)2350  
E-mail anjoho@jfc.go.jp  
ホームページ https://www.jfc.go.jp/

### 印刷 凸版印刷株式会社

### 販売

株式会社日本食糧新聞社  
〒104-0032 東京都中央区八丁堀2-14-4  
ヤブ原ビル  
Tel. 03(3537)1311  
Fax. 03(3537)1071  
ホームページ  
http://info.nissyoku.co.jp/koudoku/  
お問い合わせフォーム  
http://info.nissyoku.co.jp/modules/form\_mail/

### ■定価 514円(税込)

④ ご意見、ご提案をお待ちしております。

④ 巻末の児童画は全国土地改良事業団体連合会主催の「ふるさとの田んぼと水」子ども絵画展の入賞作品です。

国産にこだわり  
農と食を  
つなぎます。

# 第13回 アグリフードEXPO大阪 2020

プロ農業者たちの国産農産物・展示商談会

日時

2月19日(水) / 20日(木)

10:00~17:00 10:00~16:00

主催

日本政策金融公庫

会場

ATC アジア太平洋トレードセンター



食育。次世代への有り様



『大きくなあれ! 子ブタちゃん』鳥 さゆな 愛知県武豊町立衣浦小学校  
 (「ふるさとの田んぼと水」子ども絵画展2019 日本政策金融公庫 農林水産事業本部長賞 受賞作品)

■ AFCフォーラム 令和2年1月1日発行(毎月1回1日発行)第67巻10号(833号)  
 ■ 発行 / (株)日本政策金融公庫 農林水産事業本部 〒100-0004 東京都千代田区大手町1-9-4 Tel.03(3270)2268  
 ■ 販売 / 株式会社 日本食糧新聞社 〒104-0032 東京都中央区人形町2-14-4 47原ビル Tel.03(3537)1311 ■ 定価514円

■ 本誌価格 468円

